The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヒンドゥー女性とヴラト，プージャー
Author(s)	前村，恵
Citation	印度民俗研究. 1988, 6, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50330
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヒンドゥー女性とヴラト，プージャー

前　村　　恵

はじめに

「これがうちのプージャーよ。」といって、インドの女性が朝の祈りをするのを、はじめて目の当たりにした時のことは忘れられない。その祈りに大変な手間がかかること、にもかかわらずゆうゆうと楽し気に手順をふんでいくこと、このような儀式を毎朝欠かさないという初老の婦人のエネルギーにおどろかされてしまった。宗教儀礼とはひとつの娯楽であることを、いまさらのように気づかされた。

後で述べるヴラト、プージャーのような宗教儀礼は、なにか特別な雰囲気のもとで「お祭り」としておこなわれるのだという固定観念が頭の片隅にあったのだろう。ニューデリー郊外の近代的なフラットの一室でこのような光景に出会うとは、全く予想していなかった。日本でいう3ＬＤＫの間取りだがそれぞれの部屋にバスルーム（それも湯のでるシャワーつき）がついていて、テレビ、エアコン、自家用車がある実に裕福な家庭である。住んでいるのは、朝の祈りをする夫人とその夫、当時１５歳だった彼らの孫、これが筆者の滞在した時のグプタ家のメンバーで、他にサーバントの少年がひとりいる。核家族といえるような家族構成で便利な電気製品に囲まれていると、日本から来た筆者は、そこがインドであることを忘れてしまいそうだった。だからこそ目の前ではじまった朝のプージャーに驚かされてしまったのだろう。それからの滞在期間中（１９８４年３月～４月）日常生活の色々な場面でヒンドゥーの神たちが出没するなどとは、最初は思ってもみなかった。

このグプタ家を始めとして、これから述べる儀礼の様々な情報を提供してくれた人々（ほとんどが女性）は、都市に住んでいる。主婦、学生、ハウス・メイド、などなど、その年齢や社会的階層は異なっている。共通しているのは、彼女たちの１，２世代前または彼女たちの世代で、何らかの理由から故郷をはなれ伝統的な大家族制から核家族または一人住居で暮らしている点である。筆者が出会った主婦、学生は、経済的に豊かな層に属している。彼女たちの夫または父親の職種は、国家公務員、軍人、エンジニアなどで転勤が多い。そのためにインドの色々な地域に転居をくりかえしている。ハウス・メイドや大学女子寮の掃除、皿洗いなどをして生計を立てている女性たちは、ネパール、ダージリンなどの出身で、経済的困難や治安上の不安から都市に移って来た。大まかにいえば２つの階層に分かれる彼女たちだが、両者ともに生活の基盤を都市においていて、本人または保護者が労働を現金にかえて生活している。

都市に暮らす女性らのそれまでの人生、そして今後生きていくであろう人生のコースは、大筋において、農村の女性のそれとは変わらない。都市でも、女性の行動を制約する、パルダー制度や家の対面を重んじる風潮は、根強く残っている。日本に生まれ育った筆者もインド人の家庭ですごせば、インド人女性と同じ様に扱われることもある。インド人女性は一人で出歩くことはあまりない。特に若い女性は、必ず、家族か友人（もちろん同性）と連れだって外出する。筆者の場合も出かける時は、グプタ家の孫息子をおともにつけられる。た

まに家の近辺を一人で散歩すると、近所の人たちがどこかから見ているらしい。彼らにとって、おかしいと思われることをすると、必ず夫人の耳に入っていて後で注意される。「人目」を特に気にかけているようだった。インド映画で見られるラブ・ロマンスの世界は現実の生活には程遠い。

先進国並みの豊かな物質文明を指向する一方で、社会規範については保守的であろうとしている。その歪みは例えば結婚持参金制度のような深刻な社会問題になって現われるのではないだろうか。女性の首相が誕生しえた国でその一方、嫁ぎ先での命の保証が無いまでにおいつめられた妻がいる。これは一見矛盾した2つの現象のようにみえる。インド文化においては女性に生まれたことが、当事者の女性にとってどんな意味をもつのだろうか。

こうした女性達がどんな儀礼をしているのか、神になにを祈っているのか、折にふれて話題にしているうちに、彼女らの祈りは、その人生に深く関わるものだということに気がついた。

幸福な人生をすごすためには、本人や周囲の努力もさることながら、運に恵まれることが大切だ。神の存在を信じる人は、神に祈ってなんとかご利益をと考えるだろう。インドではお祈りの手引書のようなものが、よく売られている。それを読むと、どうやって祈ればご利益があるか、ということが書かれていて、参考にしている人は結構多いらしい。その類いの本を読むと、「これは息子のいる母親が行なうように」など、祈る人を限定した記述が目についた。祈る人を限定している場合、条件にかなうのは女性、それも妻、母親といった立場の人達である。祈り、祭が女性のライフ・サイクルに結びついている。

こうした祈りや祭を通して、ヒンドゥー文化の中の女性の姿を知ることはできないだろうか、と思い付いたのは日々の暮らしに密着した儀礼を目にしてからである。本稿ではこの問題について考えるために、女性のライフ・サイクルはどんなものかを最初にあきらかにし、それと結びつく儀礼のなかで実際どんなことがおこなわれているかを述べてゆく。特に後半で報告する事例で、ヒンドゥー女性にとって信仰がどれだけ本人達に近しいものであるか、紹介できれば幸いである。

1. ヒンドゥー女性のライフ・サイクル

(1) 「浄法」と女性

L・ルヌーによれば、ヒンドゥーの人生は 12 の浄法によって区切ることができる。懐妊が認定される時期に行われる受胎式に始まり、生男式、命名式、初遊式、食初式、断髪式、剃髪式、穿耳式、入門式、帰家式、結婚式、そして葬式でおわる。[1] K・M・カパディアは、これらの浄法を2つのカテゴリーに分類している。それによれば穿耳式までの段階は、人間を浄めるための儀礼であり、それ以後は、より高次の生活に入門し、共同体の成員となるための社会化の儀礼と考えられる。[2]

再生族の男性は12の浄法をすべて行なうのが望ましいとされる。その一方で女性の場合には、「聖典もて（行われるべき）儀式はなしとかく法は認めたり。」[3] とまでいわれる。受胎式と生男式（この2つは性別不明の時期に行われる。）を除く10の浄法のうち、入門式、帰家式を女子に行なうことはない。ヒンドゥーのライフ・サイクルの理想形として有名な「四住期」の最初の学住期の始めと終わりにあたるこの儀式が行われない女性には、学住期はないことになる。学住期をもって共同体成員と認められるとすれば、それがない女性はいかにして社会の一員となるのか。その答えはマヌの法典に次のように記されている。「結婚式は婦人の為の、ヴェーダの浄法にして、（男子の入門式に相当すべきもの）と宣べられる。」[4]したがって、結婚しない女性は一人前として扱われないことになる。

浄法の必要性を説くマヌの法典の中では、女性は常に家族の男性（父親、夫、息子）に服従すべきとされている。ヒンドゥーの義務である供犠、誓戒、断食なども、夫なしで行なうのを禁止されている。[5]女性が良きヒンドゥーであるためにも結婚は不可欠である。

これまで述べたように、法（dharma）の世界において、男性は支配的な立場にあり、人生の理想もまた男性を中心に想定されている。女性は男性に服従することによってのみ、その存在を認められている。

(2) ヒンドゥー女性のライフ・サイクル

誕生

家に残るのは男子のみで、女子は全部他家へ嫁ぐシステムがあるところから、生まれる子どもは男の子が望ましい。子どもが胎児のうちから、男の子であることを願う儀礼がインドにはおおくある。[6]

子どもが誕生してから6日間は母子ともに産室にこもり、6日目に沐浴するまでは、家族の日常生活から隔離されて暮らす。出産の汚れをもつ母子が、他に影響を及ぼさないためといわれるが、その一方では不安定な状態にある母子が外へ出て、魔性の攻撃を受けないためと考えられている。

男子が誕生したとき、金属性の炊事用具を打ち鳴らしたり、寺院または共同体の井戸を礼拝するなどの儀礼が、親族の女性らによって行われる。[7]（女子の誕生であっても、その子が第一子であれば、こうした儀礼が行われることもあ

る。)[8]

女子が誕生した時は、周囲はその子の容貌、特に肌の色合に関心をよせる。インド人の美の価値基準では、「白い(しばしば英語のｆａｉｒ complexionという表現で表される。)」ことを重視する。新生児を観察することによって、将来彼女がどんな花嫁になるかに思いをめぐらす。結婚持参金を重視する人々は、娘の誕生と同時に、その時のために貯えをはじめる。[9]

子どもが生まれた日にシータラー・マーター(Śītalā mātā)が礼拝されることもある。コレラから子供を守るとされる女神である。この女神のためにソーハル(ｓｏｈａｒ)という歌を近隣の女性達が歌う。[10] これは六日目まで歌われ続けられる。六日目は母子が沐浴し、日常生活に復帰する日である。この日女性らは、シャシュティ(ṣaṣṭhi)と呼ばれ、子どもを主に破傷風から守ると信じられる女神を礼拝する。この日は、子供の運命と今後の無事成長がかかった日なのである。[11]

子どもが誕生してから6日目までの儀礼は、ほとんど女性達によって行われる。[12] その後に命名式、食初式などの「浄法」をブラーフマンに行なってもらう場合もある。「浄法」は、それを行なうことによって現世と来世の罪を消滅させるといわれる。母親および周囲の女性らが行なう儀礼は、誕生した新しい生命をまもるための、はたらきかけである。

思春期

ヒンドゥーの少女が初潮をむかえると、汚れを得たとされ、細心の注意を払って潔斎を行なわなければならない。月経中の女性は調理をしてはならない、また聖なるもの(寺院や神像など)に近づいてはならない、といった禁忌が課せられるようになり、少女は自分が周期的に汚れる存在であることを知る。

スリランカのヴェラーラ・カースト(タミル人のドミナント・カースト)では、初潮をむかえた少女を祝う儀礼、すなわち成女式が行われる。[13] しかしこうした儀礼を行なう共同体は、インドでは例外的である。

成女式にかわり女性を一人前と認める儀礼は結婚である。極端な場合になると、初潮以前に結婚(儀礼的な)一幼児婚が望ましいということになる。[14] この形態は数百年の伝統をもつといわれる。現在は法律で禁止されているが、それでもなお幼児婚はあとをたたない。パラーシャラによれば、8歳の少女はガウリー(ｇａｕｒｉ)、10歳の少女はカンニャー(ｋａｎｎｙａ)、10歳以上になればラジャスヴァラー(ｒａｊａｓｖａｒａ)と呼ばれる。少女がラジャスヴァラーになっても未婚のままであれば、両親と長兄は地獄におちる、[15] 両親と祖先は経血を飲んだ場合と同じ汚れを受ける、[16] と考えられることもある。ヒンドゥーの結婚式のなかにカンニャーダーン(ｋａｎｎｙａｄａｎ)[17] という儀式があるが、このことばの背景にはこうした考え方があるのだろうか。浄法としての結婚は、本人のためのみでなく、両親や祖先に及ぶ不可避な儀礼といえよう。

今日これほど極端でないとしても、女性が結婚しないでいることは容易でない。女性が未婚でいること、結婚に失敗して実家に戻ることが、家族や親族にとっての不名誉になってしまう。現在のインドでは、比較的豊かな層を中心に

女性の学歴が高くなり、婚姻年齢も上昇する傾向にある。それでも女性の自主性は尊重されず、未婚の若い女性の振る舞いは厳しく監視される。将来の結婚に支障となるような事態にならないように、慎み深い態度が望まれる。若い女性が外出する時は、決して一人にならないように本人も周囲も配慮している。例え近所を少し歩く時でも、女性の行動をどこかで誰かが見ているのである。

少女が身体的に大人になると、結婚が強く意識されるようになる。そしてこの頃から、少女自身が良い配偶者に恵まれるように、自分から祈願する儀礼を行なうようになる。

結婚

結婚はまず配偶者の選択から始まる。配偶者は同じカーストの中から選ばれる。当事者同士の意志で結婚が決められる恋愛結婚はごく稀である。年ごろの娘や息子に配偶者を見つけるには親族間のネットワーク、新聞広告が活用される。農村などのパルダー制度がかたくまもられているところでは、どこの家族に年ごろの娘がいるというような情報を持っているのは、出入りの床屋などである。[18] そのようにして捜し出された配偶者候補らは、お互い顔見知りであることはほとんどない。また日本でいうお見合いらしいものもない。まして当事者が直接話し合うこともない。両者の相性は、生年月日時に基づいて作られたホロスコープをつきあわせて検討する。

ある程度決まったところで、縁組に関する交渉が両親その他の親族間で始まる。この場で儀式をどのように行なうか、式の費用の負担の配分は、そして何よりも花嫁側がどれだけの持参金、贈り物を用意できるか、などなどの取り決めがなされる。ここで双方の折り合いがつかなければ、縁組そのものが決裂することもある。[19]

結婚はヒンドゥーにとって「浄法」であるが、今日ではそれ以上に、家の権威や財力を他に誇示してみせる機会でもある。花婿が花嫁のところに行くのに華々しいパレードを行ない、式披露宴会場で客に豪勢な食事を振る舞い、花嫁は金糸を織り混ぜたまばゆいばかりの真紅のサーリーに、装身具の数々で、ずっしりと装う。肝心の儀式はこれらの賑わいにくらべ、地味なものに見える。このように式を華やかにするために、骨身を削るような、借金まで背負いこんで、出費につとめる人々がいる。この負担は特に花嫁側にとって苛酷なものとなる。式の費用のうえにさらに娘に持たせる金品の出費がある。現金に家具調度、衣類に装身具、これらの「不足」が娘の生命を脅かしかねないところまで、問題は深刻になっている。

ほとんどのヒンドゥーは、夫方居住の形態をとるので、結婚した女性は生家をはなれ、配偶者の家族のメンバーとなる。そのためヒンドゥーの家族の中では、娘は「よその財産（ｐａｒａ̄ī̄　ｄｈａｎ）と呼ばれる存在である。家を出るのは死人と娘だけ、とも言われている。新しく嫁ぎ先の家族となった女性にとって、その家の年長女性は権威ある存在である。婚家の義弟をのぞく男性メンバーとはほとんど接することはない。[20] １日の大半を共に過ごすのは、家族の女性メンバーであるから、新しい妻への年長女性メンバーの影響力は絶大である。

家事など日常の習慣はもちろん宗教的な行動についても、嫁いでからの女性は婚家先の方法に従う。妻はなによりも夫の長寿を祈り、また子どもの誕生を祈る。夫が健在であること、子どもがあることは、婚家での女性の地位の安定に深く関わる。その点については後述する。

母一妊娠・出産・育児

ヒンドゥー女性は、結婚してから子どもを儲けるまでの間を、緊張して過ごす。周囲から期待されている男の子の出産は、悲願のようなものだ。娘とは先にも述べたように、「よその財産」であり、嫁がせるには途方もない散財が必要だから、歓迎されない場合がある。シーマー（Sīmā）という名の女性がいたら、彼女には多くの姉たちがいるのに違いない。シーマーとは「これで（娘は）おしまい」という意味である。

男子を儲けるために、ヒンドゥーの女性が行なう儀礼は実に多種多様だ。シヴァ、ヴィシュヌのようなインド全土に通用するようなポピュラーな神格に始まり、辻に祭られる礼拝する人も名をよく知らないような神にまで祈る。日常の小さな振る舞いのあちこちに禁忌を持つ。呪術といってよいような儀礼を行なう。

妊婦がお守りを首にかけたり、枕の下にナイフを入れて眠るのは、怖れるものがあるからである。それは子どもを宿した彼女をうらやみ、何としても子どもが欲しいと切望する者の力である。[21] この怖れの背景には、子どもを望む女性の悲願、それが果たされない場合の深い失望、母となった女性への強い羨望が根付いている。このような状況で、妊娠しない女性、出産中に死亡した女性などは、子供に対し邪悪な力を持つと語られさえする。チュラーリン（curālin）、チュレールー（curelū）と呼ばれる魔物は、上述のような女性、時にはそれらが集合した幽霊といわれ、無防備な可愛い子どもの血に飢えてさ迷うと伝えられている。[22] そこで女性が出産中に死亡したような場合、そのような存在にならないよう、女性の手足の爪に釘を打ち、目の中に唐辛子の粉をいれる。死亡が出産後10日以内であれば、遺体を家から運び出してすぐ、釘をドアのわきの柱に打ち込む。[23]

インドでは、子どもがランプの煤で丁度アイ・ラインのように目のまわりを黒く塗っていたり、ターヴィーズ（tāvīz）というお守りのついた黒い糸を首にかけているのをよく見かけるが、これは魔除のためである。

母になった女性は、子どもの無事成長祈願を、折にふれて行なうようになる。子ども、特に男子を得て女性の婚家での地位は安定したものになる。その息子が成長して妻をむかえると、その地位はさらに確固としたものになる。年齢を重ねた女性が月経の煩わしさから開放されれば、家の祭壇を毎日祭ることができる。ある種の祭りでは、嫁から供物を受け取り礼拝を受けるようになる。この頃になれば、家内の儀礼を取り仕切り、威厳に満ちた存在になる。家内での年長女性の権威は女性メンバーのみならず、その息子たちにも及ぶ。F・L・K・シューによれば、ヒンドゥーの文化は男性中心的であるが、母＝息子関係は、他の親族関係より重要なものであるという。[24] 家内の女性に対する権威以外にも、息子を通じて対外的な影響力をも年長女性はもつことになる。

寡婦

妻が夫の長寿を祈る儀礼を行なうことは先に述べたが、夫の長寿とは同時に自分より長生きしてほしいという意味でもある。ヒンドゥーの女性が、夫の後で食事するのは、食習慣上給仕が必要なためだけでなく、夫の残り物を食べることによって汚れを多く吸収し、夫に先立って死ねるように、という願いの表れでもある。[25]

願いも空しく夫に先立たれたヒンドゥー女性には、寡婦としての生活が待っている。夫を亡くした女性は一目で分かるように、それまでとは異なった装い方をしている。[26] 未亡人となった女性が暮らす場所も、その年齢、頼れる息子の有無、婚家または生家の経済状態などで微妙に左右される。寡婦の立場は極めて不安定である。誰の扶養で暮らすかは深刻な問題となる。

寡婦は晴れがましい席に出られない。寡婦は家族と同じ住居にいても隔てられ、別々に食事をつくることすらある。[27] どこに住むにせよ寡婦の行動は常に監視されている。寡婦がまだ若ければ尚更である。万一彼女が異性との間に問題をおこすようなことがあれば、本人とその親族には大変な不名誉がもたらされる。再婚も名誉なことではない。むしろ寡婦の再婚は下層カーストの習慣であるとして、好ましく思われない。そして女性にとっての2度目の結婚はもはや浄法ではない。

寡婦といえばサティーとよばれる寡婦殉死の習慣が思いおこされる。この習慣は法的に禁止されており、[28] インド人はこの話題をさけたがるが、今日でもままおこることがある。サティーが行われる場合、殉死しようとする女性、殉死した女性は、崇拝の対象になる。殉死を決心した女性は花輪で飾られ、夫の火葬の火で焼死する。殉死後その女性の記念碑や廟ができ、夫の一族から、とくに子供のない女性から崇拝される。[29]

人生が順調に行くか行かないか、それは女性当人だけの問題ではない。人生の順調な流れから逸脱してしまう場合の、社会的な不名誉、汚名を被るのは、本人だけでなくその親族にまで及ぶ。それでは逸脱とはどういう状態なのかをここで検討してみよう。結婚して息子を儲け、無事育てあげてから夫に先立って往生するのが、好ましい人生である。そうした人生からの逸脱とは、多くの場合性的なものをさす。

女性は異性と性的関係を結び、子どもを生むことのできる豊饒性をもっている。それをいつ発現させるかを、ヒンドゥーの文化は限定する。その期間や時期を決定する権限は、女性当人には全くないといってよい。少女時代には行動を厳しく監視され、妻となればその豊饒性を大いに発揮することを望まれるが未亡人となれば、年齢を問わず再婚の可能性はなく、ひっそりと暮らさなければならない。従って、豊饒性を的確な時期に発現させ、そうでない時にはゼロに等しくすることが、ヒンドゥー女性の順調な人生の鍵となる。

女性は子ども＝息子を持つことで、自身の人生に権威をもたらす。息子は父親より母親との一体感が強く、母親は息子を通じてその配偶者や孫の尊敬を集める。

このようなヒンドゥー女性の人生に密接に関わる儀礼が、次に述べるヴラトとプージャーである。これらが、具体的にどういうものか、どのように女性らの生活にかかわっているかをみてみよう。

2．ヴラト、プージャーと女性の人生

ヒンドゥー教といえば、日本では多くの人が、ヴァーラーナスィーの沐浴風景を思いうかべるのだろうか。また、ヒンドゥー教に興味がある、とインド人に話すと、決まって「では是非ハリドワール、リシケーシュを見て来るように。」といわれる。こうした有名な聖地へ巡礼することに価値を見出すのも、ヒンドゥーの人々の心を理解する一つのアプローチになるだろう。しかし巡礼などの行為は、日常生活から隔たった性質の宗教的な行動である。ここではより日々の営みに近い家の中の儀礼を取り上げてみたい。そうすることによってヒンドゥーの神達が、人々にどれだけ身近なものかを理解できるのではないだろうか。

ヴラトとは、ある一定の期間（年に一度の特別な日、月に一度か二度の特別な日、週の特定の曜日など）に行われる断食などの誓いをともなう願かけの一種である。現世利益、神に崇拝の念を示す、罪業の消滅、など目的は様々である。[30] 本稿で扱うのは、主に現世利益のためのヴラトである。プージャーとは神を崇拝し、まつることである。実際の場面では、両者は別々の独立した儀礼ではなく、なにかのプージャーの機会にヴラトを行なうことが多いので、本稿でもあえて区別しない。

家庭内の儀礼は、それぞれの地域色や家の事情を反映し、一つの行事について色々なやり方がある。それらの実際を紹介するためにここに例をあげてみる。以下は、１９８４年３月～４月 にかけて、筆者が滞在したことのあるヒンドゥーの一家のヴラト、プージャーの様子、また何人かのインフォーマントによる聞き書きの記録である。なおインフォーマントの年齢、職業、出身地については、最後の方にヴラト、プージャーの一覧表を載せたので、そちらを参照されたい。

＜毎日のプージャー＞

シャクンタラー・グプタ夫人は、朝起きてから用足しと沐浴を済ませ、洗濯済みのサーリーに着替える。夫の出勤、孫の登校の支度を手伝い、食事させる。夫と孫がそれぞれに言うことを聞き分けて答えたり、あれやこれやで主婦の朝はおおわらわである。彼らが出かけた後、家の中が静かになると、夫人はおもむろにプージャーの準備にとりかかる。

まずステンレスのボールに水を汲む。ニューデリーの近代的なフラットに住んでいるから、水は水道からでる。ボールにたたえられた水は、澄んできれいな水だけれど、このままではプージャーに使えない。

水を持って祈る部屋に入る。その時はかならず素足にならなくてはならない。そこは客間として使われていて、南向きの部屋である。部屋の南東の隅に祭壇

がおいてある。それは祭壇というよりは、ヒンドゥー寺院をかたどった厨子のようなもので、白塗りの木枠に四面ガラス張りになっている。これを夫人はマンディル（mandir）と呼び、それにふさわしく所狭しと多くの神格が祭られている。マンディルの塔にあたる部分に、ドゥルガー女神の銀のレリーフの装飾がある。他にここに見られる神格は、ガネーシュ神、シヴァ神、ラーダーとクリシュナ神、パールヴァティー女神。さらに実在した聖者のスィーリー・バーバー（Sīḍī bābā）の図像も加わる。人間と同じ形で表された神だけでなく、象徴的に神とみなされているものもある。5，6cmほどの高さのリンガム、シャーリク・ジー（シャーリ・グラーマ）、[31] 真鍮製の雌牛（マーター・ジー、すなわちお母さんと呼ばれている。）などなど。

これらの神像の額の部分（または額と思われる部分）に、乾いた赤い粉がついている。これを雑巾で拭いさることから、マンディルの浄めが始まる。マンディルの隅に水の入った瓶がある。その水はガンジス河から汲んで来たもので大切に少しずつ使う。これを少し手のひらにとり、マンディルにふりかける。瓶の水を先刻のボールの水にほんの数滴たらす。これで水道の水がプージャーに使えるようになる。その水を真鍮の水差しに分ける。真鍮製の神像、石の神などを沐浴させるために、小さな真鍮の盆にのせる。水差しを少しずつ傾けては、一つ一つ丁寧に洗っていく。最初にシヴァ神のリンガムを、次にその妻パールヴァティー女神の像、雌牛、シャーリク・ジーの順で、毎日洗う。

次に白檀のかけらを水に少し濡らしてから、石のすり板でする。そうするとよい香りのする液体ができる。これをシヴァのリンガムにつけてやる。今度はローリー（rori・赤い粉）を水で練ってペースト状にし、神像の額につけていく。ガラス張りの額に入った神像にも、ガラスの上からつける。その時もし側に一緒にプージャーをする者があれば、その額にもつける。

今度は神に供物（bhog）をあげる。供物はマンディルのしたにいつも置いてある。缶の中の米粒、ほしぶどう、はぜ菓子を神像（図像にも石にも）のそれぞれに置いていく。

マンディルの下には実に色々のものが置いてある。次に取り出したのは、ダールミク・プスタク（dhārmik pustak）と呼ばれる簡単なヒンディー語で書かれたお祈り用の手引書である。その一冊を開き、「ウパデーシュ（upadeś）」と高らかに、「神の教えに心をとめるべし。」で始まる10条の教説を読み上げていく。

それが済むと今度はいよいよ護摩を焚きにかかる。アルミの器で香とマンゴーの樹皮を焚く。ウパデーシュは高らかにとなえられたが、護摩の時のガーヤトリー・マントラ（gāyatrī mantra）は、心のなかでひそかに唱えられる。樹皮はごくわずかにつまんだだけなので、護摩焚きはすぐ終わる。

次は、灯をかざしつつ神に歌をささげる。これをアールティー（ārtī）と呼ぶ。豊かな体格の夫人がこれまでは、文字通り腰を据えて行なって来たが、ここで初めて立ち上がる。左手に小さな鐘（ghaṇṭā）を持ち、右手に手燭を持つ。賑やかに鐘を鳴らしながら、右手は灯をガネーシュ神の所から始めて、時計回りにかざす。ガネーシュ神は家庭を守ってくれる神様だから、その神様

からアールティーをささげなくてはならないと、夫人は考えている。これでマンディルで行なうプージャーは終りとなる。

こんどは小さな盆に水差しと火の灯ったままの手燭、ペースト状のローリー，供物などを持ち、東側のヴェランダにでる。そこの南端にトゥルシー（tulsī）の木の鉢がある。その木にも水をふりかけてやり、葉にローリーをつけてから、手燭で灯をかざす。そして供物も置いてゆく。

そのままで西側のヴェランダに出る。そこで南を向くと、太陽は丁度正面にある。今度はスーリヤ・ジー（sūrya jī・太陽）のプージャーを簡単にする。まず光にむかって水をふりかけ、灯をかざし、夫人が時計回りに数回まわる。

ここまでを済ませてマンディルの部屋にもどり、もう一度歌いながら灯をかざす。これをしめくくりとして、この日のプージャーは全て済んだことになる。これだけのことをしてから、夫人はやっと朝のお茶をのみ、朝食をとる。プージャーにはおよそ30分かかる。

これは一つの例であるから、ヒンドゥー女性の全てが、このように毎日のプージャーを行なっている訳ではない。祭壇を倉庫内に置いて朝と夕の2回プージャーをするが、この例よりもずっと短く行なうという場合もある。その夫人は、ウパデーシュを唱えず、バガヴァット・ギーターを朗読する。家には息子の嫁がいるが、嫁のほうは毎日のプージャーに関わってはいなかった。グプタ夫人の例では、息子夫婦が外国に住んでいて、家の中に女性は他にいなかったという事情はあるが、自分がプージャーをして家庭を守ることに、両者共に生きがいと誇りを持っている。

女性を観察していると、その人がどんな儀礼を行なっているか、分かることがある。衣食の習慣が、ある日だけいつもと違うので、理由をたずねると「今日は月曜だから。」というような答えが返って来ることがある。たとえばグプタ夫人は月曜になると、普段の主食のローティーを食べない。これは夫人だけで、他の家族はいつもと同じである。このように曜日によって行動に何かのアクセントがある時は、その人がその曜日のヴラトやプージャーを行なっているとみてよい。お祈りの手引書によれば、すべての曜日にそのヴラトがある。次は、筆者がよく耳にした月曜日と金曜日のヴラトを例にとりあげてみる。手引書の方法と、インフォーマントのそれぞれの方法と合わせて述べておく。

＜月曜日のヴラト＞

このヴラトの方法を4冊の手引書で見比べてみると、[32] 祈る神格や方法などはほとんど同じである。このヴラトはシヴァ神（時にはシャンカル神）、またはパールヴァティー女神をともなったシヴァ神のために行われるもので、食事を1日1回と定めている。本によってはこのヴラトは14年間続けるのが望ましく、それが無理なら1年続ければ良いと書かれている。[33] これを行なうことでシヴァ神、パールヴァティー女神のプージャーができる。また行なう人の夫や息子に幸せが訪れるともいわれている。

では実際にこのヴラトをしている人の方法や目的はどのようになっているのだろうか。

メーラトの洗濯屋、スマナ夫人はすでに子どもが5人おり、上の娘は嫁いでいった。夫人の髪にはそろそろ白いものがまじっているが、このヴラトは子どもが生まれるように願って行なっている。月曜日には穀物類を食べないように、塩を口にしないように気を付けているそうだ。そしてアーター（ātā 全粒小麦粉）をシヴァ神にお供えし、そのおさがりを3等分にして、雌牛と子どもと家族の男性にわけるという。穀物を食べてはいけない日だから、決して自分では取らない。

うまれはネパールでメーラトに住み、大学の女子寮で皿洗いなどの仕事をしているスクマール夫人は、このヴラトはシャンカル神へのプージャーをするためと、家内安全のためと考えている。この人もやはり塩を取らないように心掛けているそうだ。

未婚の女子大生らにヴラトのことを尋ねた時は、「月曜日のヴラトのこと？」とすぐ反応が返って来た。女子大生のグプタ嬢（上述のグプタ家とは無関係）は18歳、そろそろ結婚を意識する年齢である。彼女はこのヴラトは未婚の人がするものだと強調する。彼女によれば夜12時まで食事をしてはならない、その食事でも塩をとってはならないそうだ。そうすれば良い夫がみつかるという。このヴラトが話題になっていた時に、やはり18歳の女子大生ダヴェー嬢が、「わたしはいい成績が取りたいから、月曜にヴラトをしているの。」というと、周囲の女子大生らに嘘おっしゃいといわんばかりに、はやしたてられてしまった。彼女の目的の真偽はともかく、月曜日のヴラトは、よいお婿さんが見つかるというご利益で有名なのだろう。

母と娘が同じヴラトをしていても、異なる方法で行なうことがある。グプタ夫人とその娘（既婚）は、二人とも夫の仕事の関係で、核家族でくらしている。母のほうは、食事の回数はいつもと同じだが、ローティーは決して食べない。かわりに、ジャガイモを塩と胡椒で味付けし、ギー（ghī，精製バター）で炒めたものを主食として取っている。この調理方法は通常のサブジー（カレー味の野菜料理）と異なって、ターメリックが全く用いられていない。黄色でないので、文字通り異色の料理である。この料理はお供えとしてマンディルのシヴァ神の図像のまえに飾られた。そしてこの日のプージャーは、いつもの分を済ませてから、シヴァ神のプージャーを別に行なった。シヴァ神のアールティーがうたわれ、シヴァ神に因むヴラト・カター（vrat kathā、ヴラトの由来物語）が朗読された。娘の方は1日食事を1回だけ取ることにしている。娘が里帰りしていた時の月曜日、二人はそれぞれの方法でヴラトを行なっていた。娘はシヴァ神のプージャーに参加していなかった。

これは月曜日に限らず一般的にいえるのだが、ヴラトについて尋ねた時「私はしていない」「知らない」と答えられても、必ずしもその通りではない。今述べたグプタ夫人の場合も、最初はよく知らないという答えだった。しかし月曜日になるといつもと違うことをする。そこでもう1度尋ねると、月曜日はシヴ

ァ神のプージャーをすることになっているのが分かった。先に述べた女子大生の会話でも、月曜日のヴラトのことはよく知っていても、自分はしていないという人が多かった。うっかり「している」というとダヴェー嬢のようにからかわれてしまうのを怖れているのだろうか。それとも人に知られてしまうとご利益が無くなると考えているのだろうか。

ヴラトをするには、特に食生活に普段と違う要素をとりこむことが重要になるらしい。次にあげる金曜のヴラトは、食物についての規制がはっきり表されている。

＜金曜日のヴラト＞

このヴラトの神格を、ラクシュミー女神とする手引書、サントーシー・マーターとする手引書、その両者とする手引書と、色々の立場がある。サントーシー・マーターはドゥルガー女神のことだといわれる。筆者が聞いた限りでは、ラクシュミー女神のために、という人はいなかった。

手引書の指示によれば、ラクシュミー女神を招いてから、白い花や白い布を供え、ギー、シャッカルを捧げることになっている。[34] サントーシー・マーターを崇拝する場合には、グル（gur，黒砂糖）とチャナ豆のスープを供え、それを雌牛にあたえるとよい。そして金曜日には努めて酸味のあるもの（ヨーグルトなど）を食べないようにする。[35]

ここでも例によって個人個人の方法がある。シャイリー・デーヴィーは、グルとチャナーを礼拝し、それを男の子にご馳走しなくてはならないという。[36] ダージリン出身のローイ夫人は未亡人、一人娘は嫁いだので、ハウス・メイドをしながら一人住まいをしている。[37] 夫人によればこのヴラトは、子どもが欲しい時、強力なききめがあるらしい。そこで娘に早く子が生まれるよう、チャナ豆添えのプーリー（揚げパン）を作り、酸っぱいものは食べないようにする。けれどもききめが強力な分、ヴラトのきまりを厳しく守らないといけない。ヴラトを一家中で行なう時、普通幼児などはきまりごとを守らなくてもよいのだが、夫人の方法では、酸味のあるものを子供が口にしないように、気を配る必要がある。さらにそういうものを食べた人、その種の食物をいれた器にもさわらないのが肝心である。そのうえこれらのきまりを守らなかったら、16日間はそのペナルティーのヴラトをすることになる。このヴラトのききめがあったら、忘れずにサントーシー・マーターにお礼をすることも大切だ。

金曜のヴラトでは、お供えのお下がりをだれかにわけるようにしている人が多い。シャイリー・デーヴィーの場合もそうであるし、ローイ夫人は8人の男の子にご馳走することにしている。

ヒンドゥーが女神をマーター（母）と呼ぶ時には、自らを女神の子どもとみなし、その庇護を受けようとする気持ちがある。[38] マーターと呼ばれる女神たちには、その破壊力で知られるカーリー女神、疫神であるシータラー（Śītalā）女神などがある。女神の破壊力が強ければ強いほど、女神の意にかなった場合その加護も大きなものになるだろう。サントーシー・マーターもその

ような女神としてヴラト・カターなどで恐ろしい姿を現している。（グル、チャナにまみれた、恐ろしい姿）[39] それが神々しく美しい像になると、鋭い武器を携えて、絶大なご利益を示しているのではないだろうか。[40]

次に年に1回のグプタ家のガンゴール・プージャーの様子を述べるが、その前に筆者が滞在していた時の家の事情を説明しておく。このプージャーは、グプタ家の三女によって行われた。母のグプタ夫人の夫と、その三女ミーナールの夫は、ともにエンジニアで、職業柄転勤が多い。当時母はニューデリーに、娘はィラーハーバードに住んでおり、娘は息子を連れて里帰りしていた。実家に数週間滞在したあと、娘はアリーガルの夫の実家でしばらくすごすべく旅立って行った。

＜ガンゴール・ヴラトまたはガンゴーリー＞

チャイトラ月（太陽暦）の白半月3日は、シヴァ神がパールヴァティー女神に、パールヴァティー女神は信者の女性に、その夫に長命をあたえることにより幸福な人生を約束した日であると、古くから伝えられている。この日北インドの多くの妻たちが、ゴーリー（ｇｏｒｉ，パールヴァティー女神）の像を泥で作り、それに礼拝する。ラージャスターン州では、このプージャーが盛んで大規模に行われる。

手引書によれば、これは妻だけの儀礼である。泥や土などのゴーリーに、女性の幸福を象徴する品々、すなわち人妻だけが身につけるものが供えられる。ガラス製の腕輪、足に用いる染料、額につける色粉、これらは、未婚の少女や寡婦が身につけることができないものである。供え物をし、礼拝したのちカターを聞く。それが終了すると、供えた色粉（シンドゥール）を髪の分け目につける。この日食事は1回だけとする。供えられた食物は、決して男性（子どももふくめて）には分けてはならない。[41]

筆者のみたガンゴールのプージャーの日は月曜にあたった。グプタ夫人は毎朝のプージャーとシヴァ神のプージャーを済ませた。するとそれを待っていたように娘のミーナールが入って来た。沐浴を済ませた洗い髪で新調のサーリーを着ている。普段の彼女は典型的な都市の中流インド女性に見えるが、この日の様子はいつもと違う。その違いはサーリーの着方にあるようだ。いつもはモダン・ガールのスタイルで、サーリーの端で頭をかくさないでいるのが、この日は頭をすっぽり覆っている。娘と入違いに母は部屋から出た。二人とも夫がいるのに、なぜ娘だけがこのプージャーをするのか聞くと、グプタ夫人は、「このプージャーはうちじゃしないのよ。」と答えた。娘がこのプージャーをするのは結婚してからで、毎年夫の実家で行なっているという。

娘は小さな盆を持って入って来た。その中にドゥネーという小さな揚げ菓子[42]と、10ルピー札、シンドゥールがある。そのシンドゥールを水で溶いて人差し指につけ、祭壇（いつものマンディル）の前にサティヤー・ジーを描く。例年の夫の実家でのプージャーでは、姑、兄嫁二人、自分の4人が、それぞれに

このような盆を用意し、それぞれがサティヤー・ジーを描くという。[43] そして姑から年の順でプージャーをするのだそうだ。その後でカターを聴く。

ドゥネーは後でお下がりとしていただく。シンドゥールは、プージャーを終えたミーナール夫人の髪の分け目を、赤く彩った。10ルピー札は10日後に会うお姑さんに渡すのだそうだ。

ミーナール夫人のサーリーの着方についてもう少し述べておきたい。この後1週間ほどして、ドゥルガー・プージャーが行われた。[44] この時は母娘が並んで祈り、声をそろえてドゥルガー女神のアールティーを歌った。なんとこの日、娘は頭を覆わないいつもの装いだった。祈るために頭を覆うのであれば、なぜガンゴールの時はしたことを、この日はしないのか。もし娘の振る舞いに、適当でないところがあれば、母はきっとたしなめたはずなのだが。

そこで思いおこされるのが、その2週間ほど前に、イラーハーバードから出て来たグプタ氏の甥の、まだ若い妻のことだ。彼女もまた、夫の伯父の家で、その家族のまえでは、いつもサーリーの端で頭を覆っていた。ミーナール夫人も夫の実家ではそのようにするのだそうだ。するとミーナール夫人は、自分の実家にいながらも、夫の家族の一員として、ガンゴールのプージャーを行なったことになる。そして10ルピーのお札はお姑さんに渡される。そうしたことを考えると、プージャーは夫の長寿祈願のためだが、その采配をする人の権威を自他ともに感じる時でもある、と思える。因みにグプタ夫人は、毎朝のプージャー、月曜日のプージャー、ドゥルガー・プージャーのいずれも、頭を覆うことはなかった。

嫁が姑を礼拝し、かつ捧げものをすることになっているプージャーが、幾つか手引書のなかに見られる。ヴァイシャーク月、アーシャール月、マーグ月の日曜に行われるアースマーイー・プージャー（āsmāī pūjā）では、姑の足に伏して触れるようにと書かれている。その祭りのカターでは、そのようにした嫁が、姑の祝福を受け、その後立派な男の子を生んだ話が語られている。またバードラパド月のブーリー・ティージュ（būḍhī tīj）や、同月のバチャバーラス（bachavāras）などで、姑に1ルピー渡すように指示されている。[45]

このように、家内の年長女性は、プージャーなどの采配をふるうだけでなく礼拝する嫁達から供物を得ることがある。それは女神とその崇拝者の関係が、そのまま姑と嫁にあてはめられたようである。

ヒンドゥーの女性は人生を通じて祈りに関わっていく。少女時代には将来の自分の結婚が良縁であるように祈る。妻となれば夫の長命を、子どもに恵まれることを、母は子の無事成長を祈る。祈り続けた女性が、嫁から姑の立場になった時、年長女性としての権威を持つ。このような順調な人生を願う女性達の心のよりどころにヴラト、プージャーはある。母や周囲から得た知識をもとに、時にはお祈りの手引書などに助けられながら、自分の信ずるまま、神に訴える。

結　び

Dr.D. シャルマーの「民間信仰辞典」によると、少女と寡婦はビンディー（bindī，女性が額の中央につける赤い点）をしてはならないそうだ。ビンディーに用いるシンドゥールという粉の赤い色は血の色と関わり、女性が初潮をむかえてからつけるものだという。赤＝血は豊饒性の象徴となるから、子供を生めない（生んではならない）寡婦もまた、これに関わるものを身につけてはならないというわけだ。[46] 日本では身につける色彩の規範が、年齢で左右される傾向にあるが、インドでは年齢はあまり関係ないようだ。

ニューデリーのパンジャーブ人コロニーではチャイトラ月のある日、婦人達がそろってピンク系統の色のサーリーを着る。しかしこの日すべての婦人がピンクのサーリーを着ているわけではない。未亡人の女性はいつもと同じ白無地または無彩色の無地のサーリーですごす。このことの背景にも、ビンディーは夫ある女性のつけるものとする規範があるのかもしれない。

ヒンドゥーの女性達の日常生活を気をつけてみると、自然と文化を結びつける無数のメッセージがある。女性は豊饒性にみちた自然になぞらえられ、家族の繁栄をになっている。しかし、本来は豊饒性が備わった女性であるにもかかわらず、未婚の女性と寡婦はこのなかからきびしく除外されている。そこにヒンドゥーの文化の特徴があるのではないだろうか。

女性は法典にかかれるような、徹底した服従者ではない。むしろ社会は女性の豊饒性を支配するために厳しい規制をもうけているのである。その背景には女神を母と呼ぶことに表される母に力を認める文化があり、母になろうとして命を落とした者をおそれるなど、母をめぐる畏敬の念がある。女性が服従を余儀なくされているのは結婚のシステムのためである。このシステムに順応し、社会の規範におさまったうえで、母の力ははじめて発揮される。家庭の繁栄や家族（特に男性メンバー）の無事を祈る行事の采配をふるう姿は、あたかもブラーフマンのごとくである。その一方で順調なライフ・サイクルをおくれなかった女性も影響力を持つ。先に述べたようなヒンドゥーの規範から逸脱した女性の行為が、その一族に不名誉を与える。これらは好ましくない影響力であり当事者にとっても大変不幸な事態である。これは女性の豊饒の力が社会規範の影響を受け、破壊的に働く場合である。

女性は人生の各段階を通じて、自らの持つ豊饒の力が、好ましい方向に向くか否かの瀬戸際に立たされている。ヒンドゥー女性の祈りには、そんな切実な面がある。かといって、そのような祈りにそれほどの悲壮感が漂うわけではない。儀礼に楽しみを見出して、それを日々の彩りとしている。こうした女性の日々の営みが、ヒンドゥーイズムを生活に極めて身近なものにしているのだろう。

最後に、この聞き書きの調査を行なうにあたり、ご協力いただいた方々に、心からの感謝の意を表したい。

注

① ルイ・ルヌー「インド教」文庫クセジュ　1973年　第6刷 87ページ
② K．M．カパディア　「インド社会の婚姻と家族」未来社　1969年　213 ページ
③ 田辺繁子訳「マヌの法典」岩波文庫　1983年第17刷　9－18　264 ページ
④ 同上　2－67　49ページ
⑤ 同上　5－155　164ページ
⑥ Brigs,G.W. The Chamars The religious life of India, N. faquha ed, 1920 p60
⑦ ibid p63
⑧ Roy, Manisha. Bengali women 1975 p17
⑨ ibid p17
⑩ Brigs op,cit p63
⑪ ibid p66
⑫ 八木祐子「北インドの出産」（季刊民族学40号）40～43ページ
⑬ 関根康正「人の一生を彩る祭」『スリランカの祭り』96ページ
⑭ 実際の婚姻関係が成立するまでは、男女別々に生活する。
⑮ 前掲カパディア　215ページ
⑯ 人間が体外に排泄するものの中で最も不浄とされている。
⑰ 乙女（カンニャー）を贈与するの意
⑱ 佐々木明「ダーデキー・サールハープルの宗教生活(1)」（民族学研究 45－4　1981・3）
⑲ D．ラピエール「歓喜の街カルカッタ（下）」に交渉の詳しい描写がある。
⑳ 義弟とはいわゆる冗談関係にあり、親しく接することができる。
㉑ Brigs,G.W op,cit p61
㉒ Babb, Lawrence. The divine hierarchy: Popular Hinduism in Central India, 1975 p76
㉓ Brigs, op,cit p61
㉔ F・L・K・シュー「比較文明社会論」1980年第8刷培風館　50ページ
㉕ 関根康正「ジャフナ・タミルの葬送儀礼」季刊人類学
㉖ 白い無地または泥色のサーリーを着、人妻の幸福を象徴するガラス製の腕輪（cūṛī）を割る。また髪を極端に短くしてしまうなど。
㉗ 筆者の知る例では、3階建てのフラットの3階に寡婦が、1階にその実家の（フラットの大家）家族が住み、2階は別の家族がすんでいた。3階とはいえ、屋上に小さな（日本でいう）ワンルームが作り付けただけの質素な住居で、食事も未亡人は自分の分を作って食べていた。
㉘ 1829年、英国政府時代
㉙ Mayer,Adorian.C. Caste and kinship in Central India,1960 p193
㉚ ヴラトの定義、分類などについては、以下の文献を参照されたい。
古賀勝郎「ヴラタ・カター」世界口承文芸研究第4号昭和58年

小西正捷「ベンガルのブラタ儀礼」季刊人類学５－１

㉛ ヴィシュヌ神がその姿を変えたといわれる石

㉜ Śrī Bāl Mukand Caturvedi, Somavār vrat hathā, Śrī Gōpal pustakālay Mathura
Tripāṭi Śastrī, Rāmpratāp, Hinduōn ke vrat, parva, tyauhār Lok bhārtī prakasan, 1975, Ilāhabād
Dube, Sukdev. Hamāre vrat tathā tyauhāl, Parag prakāśan 1983 Delhi
Āśā bahan vo Lādo Bahan, Hinduōn ke vrat aur tyauhār Randhīr book salse, Haridvār

㉝ Tripāṭhī, op,cit p343

㉞ Dube, op,cit p113

㉟ Āśā bahan vo Lādo hahan op, cit p202

㊱ ヒマーチャル・プラデーシュのガルワール出身で、当時メーラト大学の女子寮でサーバントをしていた。故郷では農家に育ち、結婚もしたが何かの事情でメーラトには単身で出て来たらしい。出身の地方では既婚の女性をデーヴィーと呼ぶそうだ。

㊲ ダージリンで裕福な家庭に生まれたが、幼い頃家が強盗に襲われて以来デリーに出て来たという。故郷にはヴラトの習慣はなかったというが、彼女の記憶にないだけかもしれない。

㊳ O'Fraherty, W.D. Sexual metophors and animal symbols in Indian mythology, 1981 p106

㊴ Āśā bahan vo Lodā bahan op,cit p214

㊵ 三又の戟と鋭い剣を持つ。

㊶ Tripāṭhī op,cit p35

㊷ アーターを原料に、指輪のような形で直径３㎝ほどの大きさのもの

㊸ 卍、スワスティカ

㊹ ベンガルではアーシュヴィン月に行われる。

㊺ Āśā bahan vo Lādo bahan op,cit p26,p53

㊻ Śarmā, Dr. Dharmavīr. Lok viśvās śabd koś Rāj publishing house, 1980 p82

参　考　文　献

古賀勝郎　「ヴラタ・カター」『世界口承文芸研究』第４号　大阪外国語大学口承文芸研究会　昭和５８年

小西正捷　「ベンガルのブラタ儀礼」『季刊人類学』５－１　京都大学人類学研究会　１９７４年

佐々木明　「ダーデキー・サールハープルの宗教生活(1)(2)」『民族学研究』４５／４　1981．３，46／1 1981．6．

菅沼　晃　『インド神話伝説辞典』　東京堂出版　昭和 60 年

関根康正　「人の一生を彩る祭」『スリランカの祭り』　井狩・鈴木・関根・岩田共著
「ジャフナ・タミルの葬送儀礼」　季刊人類学
田辺繁子　『マヌの法典』　岩波文庫　1983年 第17刷
中根千枝　『家族の構造』　東京大学出版会　1979年 第5刷
宮田　登　『女の霊力と家の神』　人文書院　昭和58年
〃　『ヒメの民俗学』　青土社　昭和62年

F. L. K. シュー（作田・浜口共訳）　『比較文明社会論ークラン、カスト、クラブ、家元』　昭和55年　第8刷　培風館
K. M. カパディア（山折哲雄訳）『インドの婚姻と家族』未来社　1969年
ルイ・ルヌー（渡辺・美田共訳）『インド教』　文庫クセジュ　1983年

Babb, Lawrence. A. The divine hierarchy, popular Hinduism in central India, 1975
Brigs, W.G. The chamars; The religious life of India, 1920
Crooke, William The popular religion and folklore of Northern India Vol 1,2 1978 Munsiram Manoharlal Publishers
Dougras, Mary. Purity and danger-An analisis of concepts of polution and taboo 1979 Routeledge and Kegan Paul Limited
Mathur, K.S. Caste and ritual in a Malwa village
Mayer, Adrian. Caste and kinship in Central India 1960
O'fraherty, W.D. Sexual metophors and animal symbols in Indian mythorogy Motilal Banarasidas 1981
Roy, Manisha. Bengali women 1975
Upadhyay, Vasdeva. The socio religious condition of Northern India 1964 Chowkhanbha Publication
Sri Bāl Mukand Caturvedi. Somavār vrat kathā, Sri Gopāl pustakālay Mathurā
Tripāthī Sāstrī, Rāmpratāp. Hinduōn ke vrat, parva, tyauhār Lok bhārati prakāśan, 1975, Ilāhabād
Dube, Sukdev. Hamāre vrat tathā tyauhār, Parag prakāśan 1983 Delhi
Āśā bahan vo Lādo Bahan. Hiduōn ke vrat aur tyauhār Randhīr book salse, Haridvār
Śarmā, Dr. Dharmavīr. Lok viśvās śabd koś, Rāj publishing house, 1980

資　料

以下の表は1984年の3月から4月にかけて、ニューデリー、メーラトを中心に行われた聞き書き調査の結果を、簡単に表にまとめたものである。インフォーマントについては、本文の最初の部分で述べたのでそちらを参照されたい。ここではなるべくインフォーマントから聞いたままを記すようにしたので、矛盾している例もいくつか見られる。個々のデータについては、筆者の知り得た限りを提示したつもりであるが、調査条件や方法などの不備のため、わかりにくい点が多いのをお詫びしておく。

＜表の見方＞

ヴラト、プージャーの行ない方を下記のように整理した。

1・インフォーマントの家族の誰がおこなっているか。？になっている場合はインフォーマントが、行為者を特定しなかった時である。

2・目的、理由など。

3・食物の規制（＋）食べてよいもの（＋＋）食べるべきもの
（－）食べられないもの

4・その他の特徴

（＊）は筆者注

インフォーマントの名前の下の地名は、出身地。

＜表にしたヴラト、プージャーとインドの暦について＞

祭礼関係の暦は月齢にしたがって定められている。ひと月は満月の次の月から晦日にいたる黒半月、朔日から満月にいたる白半月に、2分されている。

インド暦	太陽暦
チャイトラ（caitra）	3月～　4月
ヴァイシャーク（vaiśākh）	4月～　5月
ジェーシュト（jyeṣṭḥ）	5月～　6月
アーシャール（āṣāḍḥ）	6月～　7月
シュラーヴァナ（śrāvaṇa）	7月～　8月
バードラパド（bhādrapad）	8月～　9月
アーシュヴィン（āśvin）	9月～10月
カールティク（kārtik）	10月～11月
マールガシールシャ（mārgaśirṣa）	11月～12月
ポーシュ（pauṣ）	12月～　1月
マーグ（māgh）	1月～　2月
パールグナ（phālguna）	2月～　3月

（ただしおおよその目安）

チャイトラ月

・白半月1日目～9日目　ドゥルガー・プージャー（ナヴァ・ラートリー）
(Durgā pūjā)　(nava rātri)

・白半月3日目　ガンゴール・プージャー
(gangaur pūjā)

バードラパド月

・黒半月8日目　ジャンマーシュタミー
(janmāṣṭamī)

・白半月4日目　ガネーシュ・チョウト
(Ganeṣ cauth)

アーシュヴィン月

・白半月1日目～10日目　ドゥルガー・プージャー（ナヴァ・ラートリ）
(Durgā pūjā)　(navarātri)

・白半月9日目　サラスヴァティー・プージャー
(Sarasvatī pūjā)

カールティカ月

・黒半月4日目　カルワー・チョウト
(karvā cauth)

・黒半月8日目　アホーイー
(ahoī)

パールガナ月

・黒半月14日目　シヴァ・ラートリ
(Śiva rātri)

（シャンカラ・チョウトのみ不明。いずれかの半月の4日目と推定される。）

アガルワール 女・未婚・18才 U・P 学生	カルワー・チョウト	1 母親（米有夫女性のヴラトと言われる） 2 夫の長寿祈願 3 （一）全ての食物・水 4 断食は月の出まで。この日ごちそうを用意し、月の出後食事。
	シヴァ・ラートリ	1 母親 2 不明 3 （一）全ての食物 4 朝プージャーをする。食事は1日1回
ガイー 女・未婚・18才 パンジャーブ 学生	カルワー・チョウト	1 母親、時々娘も。（米ただし本人がしているのかは未確認。） 2 夫の長寿。娘にとっては縁結び祈願。 3 （＋）甘いもの、ココナッツ＝サルギー （－）全ての食物・水 4 サルギーとはヴラトの始まる日の出までに食べておくもの。（sarghī） ヴラトは日の出から月の出まで。 月が出たら、月に水を捧げる。 娘がこの祈りをする時には、月でなく星に水をささげる。
グプタ 女・未婚・18才 U・P 学生	月曜のヴラト	1 本人、父親、母親 2 縁結び祈願 3 （一）塩、全ての食物 4 ヴラトは夜12時まで。食事はその後。 縁結び祈願の場合のヴラトは、未婚女性に限る。塩は特に気をつけてとらないようにする。
	シヴァ・ラートリ	1 本人、母親 2 不明 3 （一）穀物類 4 必ず寺院へ行く日。カター（祭礼縁起物語）を朗読する。したい人は誰でもできるヴラト。

グプタ 女・既婚・50才 U・P 主　婦 （米先述のグプタ嬢とは無関係）	月曜のヴラト （本文参照）	1　本人 2　何となく。（米シヴァ神のプージャーを特に行うため。） 3　（＋）ジャガイモ、塩、胡椒 （－）穀物（米ターメリック） 4　食事はいつもと同じ回数とるが、（＋）の食物だけ食べる。 いつものプージャーにあわせ、特にシヴァ神のプージャーを別に行なう。
	ドゥルガー・プージャー	1　本人 2　不明 3（＋＋）9日目、スージーのハルワー（米セモリナのプディング） 4　9日目、トゥルスィーの葉と赤い花をドゥルガー女神に捧げる。 同日女性はピンクのサーリーを着る。 ドゥルガー女神のアールティー。マンガル（女神の9つの名が入っている。）を読む。
グプタ 女・未婚・26才 U・P 主　婦 （上述のグプタ夫人の娘 ガンゴール・プージャーの項を参照のこと）	ガンゴール・プージャー	1　本人、嫁ぎ先の兄嫁たち。（米本人は末男の嫁） 2　夫の長寿祈願 3（＋）ドゥネー　（－）ダール、米、ローティー 4　（米本文参照）
	月曜のヴラト	1　本人 2　何となく 3（－）塩 4　食事は1日1回　カターを読む。
	カルワー・チョウト	1　本人、兄嫁たち、嫁いだ娘達（婚家先の義姉妹） 2　夫の長寿 3（－）全ての食物・水 4　日没までにカターを聞くこと。嫁ぎ先でこのプージャーをする時、カターを読ませるために、嫁いだ娘が呼ばれることもあった。

	アホーイー	1　本人（息子を持つ母） 2　息子の無事成長祈願 3（一）全ての食物 4　食事は星の出を待つ。婚家先で覚えたヴラト。カターを読むのは夫の妹（未婚）の役目。
チョウドリー 女・未婚・24才 西ベンガル 学　生	ドゥルガー・プージャー （ナヴァラートリ）	1　本人、母親（※本人は14才の時から始めた。） 2　プージャーのため 3（一）穀物、ただし8日目のみ 4　ドゥルガー女神の像を飾りたてる。 6日目に人々は新しい服に着替える。 8日目にヴラトが行われ、食事は1日1回とする。同日の朝、ドゥルガー女神に供物を捧げプージャーを行なう。夕方にはアールティーを捧げる。夜は歌を歌うなどして催し物を行なう。 9日目、女神のプージャーを行なう。（※ナヴァラートリ） 10日目、女神の像を川に流す。（非常に悲しく哀れを催す光景であると本人が語った。）
	サラスヴァティー・プージャー （ドゥルガー・プージャーの9日目）	1　本人 2　学問の女神サラスヴァティーを祭る。 3　特になし 4　サラスヴァティー女神を美しい衣服で飾る。 このプージャーをする人は、黄色い服を着る。 文化的な催しを行う。 プージャー後、女神を川に流す。
ダヴェー 女・未婚・18才 グジャラート 学　生	月曜のヴラト	1　本人 2　学業成就 3（一）塩 4　食事は1日1回

	火曜のヴラト	1　父親 2　ハヌマーン神のプージャー、望みをかなえるため。 3（＋）昼＝果物・夜＝果物、キール（ライスプディング （－）昼＝果物以外の食物 4　早朝神にプージャーをする。 食事前に神に祈り、神の姿を心に描く。
	木曜のヴラト	1　姉、父方祖母 2　心の平安を得る 3（＋）夜＝黄色い食物（ターメリックを用いたもの）（－）塩 4　黄色の服を着る 祖母は日に3回プージャーをする。
バッラー 女・既婚・50代 パンジャーブ 主　婦	カルワー・チョウト	1　？ 2　夫の長寿祈願 3（－）全ての食物・水 4　新しいサーリーと腕輪をおろす日 嫁は結婚後の最初のカルワー・チョウトの日、持参してきた装身具を身につける。
	ドゥルガー・プージャー	1　本人、家族全員 2（＋＋）9日目にスージーのハルワー （－）肉、にんにく、たまねぎ （米この家族は肉、魚類も食べる。） 3　プージャーのため 4　1日目大麦の種を小さい皿の上にまく。これをドゥルガー女神像の前に置き、毎日プージャーをする。 9日目ピンクのサーリーを着る。育てた苗（yog）を川に流す。 同日朝、9人の少女が家々を訪問しにくる。その少女達の足を洗ってやり、礼拝する。

バッラー 女・既婚・26才 パンジャーブ 主　婦 （上のバッラー夫人の嫁）	ガネーシュ・チョウト	1　？ 2　不明 3（一）全ての食物 4　1日中食事をしない
	カルワー・チョウト	1　？ 2　夫の長寿祈願 3（＋）サルギー（日の出前に）（一）全ての食物・水 4　食事は月の出を待ってする。 夕刻に盆にランプを置く。 この日ガラスの腕輪をする人を多く見かける。 針や糸に触れないように気をつける。
ローイ 女・寡婦・50代 ダージリン （本文参照） ハウスメイド	火曜のヴラト	1　本人 2　罪業消滅 3（一）肉・魚類 4　ハヌマーン神のプージャーを行なう。 タブーに違反したら、謝罪が必要である。
	金曜のヴラト	1　本人 2　子供を得るため。子供の無事成長。娘に子供ができるように。 3（＋）チャナ・プーリー　（一）酸味のある食物 4　チャナ・プーリーを作り8人の男の子に食べさせる。酸味のあるものを食べた人に近づかず、そうした食物の器にも触れないように気をつける。 これらのきまりを破れば、16日間分やりなおすことが必要。願いがかなったら、そのお礼をかならずする。
ヴァルマー 女・未婚・18才 U・P 学　生	月曜のヴラト	1　本人、母親、父親（時々） 2　不明 3（一）全ての食物 4　ヴラトは夕食まで。

	ドゥルガー・プージャー	1　？ 2　不明 3（＋）果物と牛乳（9日目）
	ジャンマーシュタミー	1　本人　母親 2　クリシュナ神のプージャー 3（＋）昼＝果物・牛乳、夜＝じゃがいも （－）穀物、昼＝甘いもの 4　夕刻になったら寺へ行く。
	シヴァ・ラートリ	1　本人　母親 2　何となく 3（＋）日に1度だけ牛乳と果物、牛乳からできたもの （－）穀物 4　寺院に行くようにする。 父はこのプージャーを時々行なう。
シャイリー・デーヴィー 女・既婚 （推定）40代 （注㊱参照） ヒマーチャル （ガルワール） 大学寮職員	月曜のヴラト	1　本人 2　シヴァ神の崇拝のため 3（－）塩
	火曜のヴラト	1　本人 2　？ 3（＋）キチュリー（豆がゆ） （－）キチュリー以外の全ての食物
	木曜のヴラト	1　？ 2　不明 3（＋）黄色くした米　（－）バナナ
	金曜のヴラト （本文参照）	1　本人 2　？ 3（＋）グル、チャナ （－）酸味のあるもの 4　グル、チャナを礼拝する。そのおさがりは男の子に分ける。
	日曜のヴラト	1　本人 2　何となく 3（＋）甘いもの　米も甘くする。 4　満月の日におこなう

	カルワー ・チョウト	1　妻 2　夫の長寿のため 3（一）全ての食物・水 4　ヴラトは月の出まで
	シャンカル ・チャウト	1　？ 2　息子の無事成長 3（＋）牛乳　草のようなもの　（一）塩 4　シャンカル＝シヴァ神は最も偉大な神である。 木の皮をくだいて薬をつくる日でもある。 ラッドゥー（豆の粉を丸めてつくった菓子）を１２１個作る。
スクマール 女・既婚 （推定） ３０～４０代 主婦・清掃等 （通い） ネパール	月曜のヴラト	1　本人 2　家内の安全、シャンカル神へのプージャー 3（一）塩
	木曜のヴラト	1　本人 2　家内安全 3（＋）ヴェーサン（豆の粉）で作ったローティー 4　シヴァ神にプージャーをする。
スマナ 女・既婚・ （推定）４０代 U・P 主　婦 洗　濯　屋	月曜のヴラト （本文参照）	1　本人 2　子供の誕生 3（一）穀物と塩 4　シヴァ神にアーター（全粒小麦粉）を供える。そのおさがりは、３つに分けて子供、家内の男性、雌牛に与える。
	金曜のヴラト	1　本人 2　何となく